

## 夜話 研究者出発の遠い遠い思い出話から ①

大学院修士課程2年生に入ってから、戦前生活綴り方教育史研究に取り組むようになった。今から考えると随分無謀な研究開始だった。友人たちは、卒業論文をベースとしてさらに発展させるために研究をしていたのだから。ペスタロッチ研究を発展させるつもりでいたところが、ペスタロッチはダメだと（故）倉澤栄吉先生は言う。

（修士）1年時の冬休みに帰省しており、街の小さな古本屋で『調べる（べた）綴り方とその指導実践工作』という風変わりの書籍を見つけ購入してあったので（その時はただただ好奇心に駆られて）、2月に行われた修士論文指導会の時に、その書籍の1論文（野村芳兵衛論文）を下敷きにして、簡単なレポート報告をした。「野村芳兵衛研究—調べる綴り方論を中心に」こんな表題だった。

またもや倉澤御大が「野村芳兵衛は研究され尽くしている。おまえみたいな低学力の人間でそれを越えることは不可能だ。だが、調べる綴り方は大変いいテーマになる。そして上田庄三郎は調べる綴り方論を本格的に提案した人だ。調べる綴り方だったら上田にせよ。息子たちは共産党の大幹部だから、ぼく、民青の活動家です、と言えは会ってもらえるかもしれない。」

これがゼミでの指導の言葉だからねえ。他のゼミ生たちはそっぽを向いていたが、御大の目は厳しくて暖かい光を放っていた。今、倉澤先生の言葉を翻訳すると、「研究の広い裾野の中からこれはという素材に光を当て、それを対象として研究を進めなさい。オリジナリティを見出しなさい。研究は文献研究だけではない、聞き取りなどの調査を行いなさい。その手がかりを君に提供しよう、戦前生活綴り方研究を従来のような北方性を絶対とするのではなく、子どもが主体となる学習を開拓したという視点から捉えなおしなさい。それは君がペスタロッチ研究で果たそうとした課題意識そのものなのだ。その問題提起をし、各地の実践家を開明した上田庄三郎をとことん研究しなさい。修士論文提出までに残りの時間はないけれど、君の潜在的活力があれば必ず出来る。頑張りなさい。」ということになる。

修士論文提出まで11か月。それまでに、ほとんど未知の世界であった戦前生活綴り方を学び取り、先行研究の問題性、未解明性を洗い出し、上田庄三郎に関する叶う限りのオリジナル資料を収集し、分析総合し、論として組み立てる、もちろん、とりわけ上田に関わる当事者からの聞き取り等を通して、オリジナル資料の裏づけ、さらにそこから発展していく論理、事実を洗い出して、発展的研究課題とする、そういう作業をこなすことを「命じられた」次第である。

行方は難しー。何せそういう研究方法を身に着けてきていなかったから。H君という大学院同期の友人が、手取り足取り、実践的な研究方法を教示してくれたことが、ぼくの進む道を具体的に拓いてくれることになる。